紀　　要

第 17 号

2004.3

財団法人 滋賀県文化財保護協会

甲良町金屋所在の石仏について

上　垣　幸　徳

「郷愁の風景」とか称するイラストなどというと夕暮れの田舎道に石造のお地蔵様といった光景が描かれているのが定番になっているように、日本のあちこちに石でできた仏像が普遍的に見られる。この滋賀県でも例外なくあちこちに石仏が見られる。筆者は、石仏の一部である阿弥陀如来を浮き彫りしたものについて、若干の考察を試みたことがあり(1)、この種の石仏は墓地の追善供養に用いられていることを明らかにした。

このような石仏の製作に関連していると考えられる資料が甲良町金屋に残されている。この集落は甲良町の西部、扇状地の頂部に位置する集落で、伝統行事の千草盆等が伝えられている地でもある。甲良町金屋の周辺には小尾根上のテラスに造営された区画墓に五輪塔や石仏が配置されていた同町正楽寺の正楽寺遺跡(2)や雛壇状に整形された斜面に多数の石仏や五輪塔が配置された多賀町敏満寺の敏満寺遺跡内の石仏谷中世墓地(3)といった石仏に関連した遺跡が存在する。その意味でも石仏製作関連の資料は興味深いものがある。その資料というのは集落内に所在する金山神社に残されていた石仏群で、発見者の瀬川欣一氏はこれらの石仏群が未製品、破損品で占められているためこの地で石仏が製作されていたことを示す資料(4)だとされた。現在、この石仏群は「金山神社境内未完成石塔群」として甲良町指定文化財となっている。だが、金屋の集落内には指定物件以外にも石仏が存在する。集落内の石仏には未完成品だけではなく、完成品も見受けられ、中には近辺で見られる石仏とは異なる形態を持つものがあった。そこで筆者はその資料価値を鑑み、いくつかの石仏を実測し、資料化することとした。その成果をこの場を借りて紹介することとする。

今回紹介する資料は現在集落の北側の小堂に納められている。2003年10月頃までは現在の所在地から道を挟んだ向かい側にある民家の傍にあり、現在のものとは異なる小堂に納められていた。戦前以前からここにあったようであるが、正確にここにいつからあるのかは不明で、その出所や来歴について知り得ることは困難な状況である。今回資料化した石仏は次の５体で、以下にその詳細を述べることとする。（資料番号は図２の番号と同一）

１は長さ55.0cm、最大幅21.6cm。最大厚15.0cm。坐像１体を浮き彫りする。頭部には尊顔が彫られている。正面で印を組んでいると見られる両腕、衣装、脚部、台座の表現もあるが、衣文が見られないなど退化したものとなる。尊像の両側には支柱の表現がある。頂部は圭頭状にし、側面はほぼ直線状に整形する。表面の額部および尊像よりも下部は原礫面が

図１　石仏所在地および周辺遺跡（Ｓ＝1/50,000）

残る。背面の上部2/3は加工するが、下部には原礫面が残る。使用石材は火成岩である。

2は長さ48.0cm、最大幅23.8cm。最大厚16.0cm。坐像1体を浮き彫りする。頭部には尊顔が彫られる。正面で印を組んでいると見られる両腕、衣装、脚部、台座の表現もあるが、衣文の表現がないなど退化したものとなる。尊像の両側には支柱の表現がない。額部は圭頭状にするが、表面側は欠損する。側面はほぼ直線状に整形するが、上部に向かって幅が狭くなる。表面の尊像よりも下部には原礫面が残る。背面の上部4/5は加工するが、残りの部分は原礫面が残る。使用石材は火成岩である。

3は長さ45.3cm、最大幅23.5cm。最大厚13.9cm。尊像頭部より上と左側を欠損する。坐像1体を浮き彫りする。頭部には顔の表現は見られない。胴体は彫りだされているが、腕や脚部の表現は見出せない。尊像の両側には支柱の表現がある。側面はほぼ直線状に整形する。表面の尊像よりも下部は原石面が残る。背面に加工痕が残るが、1、2に比べて加工された範囲は狭い。加工されない部分以外には原礫面が残る。使用石材は火成岩である。

4は普遍的に見られる形態とは異なるものである。長さ34.2cm、最大幅18.6cm。最大厚13.1cm。尊像1体を浮き彫りするが、頭部のみ彫りだされているだけでその他の仏像に関する表現はいっさいない。尊顔も円形の輪郭と鼻と見られる矩形の彫り出しがあるだけである。全体は紡錘状を呈する。表面は仏像頭部以外の部分を平滑に仕上げる。背面の上部3/4に原石面が残る。使用石材は火成岩と見られる。これについては石仏でない可能性も否定できないが、他に当てはめられうる事例を見出せないこと、現状でこれ以外の石仏と一緒に信仰の対象となっている点から、ここでは石仏として取り扱うこととする。

5も普遍的に見られる形態とは異なる。現状の長さ93.1cm、最大幅29.8cm。最大厚19.8cm。5体の内最大の石仏である。ただし、埋設されて建っているため、全体の正確な長さは知り得なかった。正面に尊像1体を浮き彫りする。頭部には尊顔が彫られ、螺髪の表現も持つ。正面で印を組んでいると見られる両腕、衣装、脚部の表現もあり、1よりも若干古相を示している。ただし、衣文の表現はない。台座の表現もないが、脚部の直下に逆蒲鉾状に原石面が残っており、台座を意識している可能性がある。頂部は石材側面を剥離し圭頭状に仕上げる。頂部以下の側面は原石面を残す。背面は設置状況の都合上、よく観察できなかったが、原石面がほぼ全面に残っているようである。使用石材は火成岩である。

以上5体の石仏に関して、上記の特徴を基に若干の考察をしてみたい。

まず、石仏の尊像についてであるが、定印を体の前で組む坐像と理解できることから阿弥陀如来を表現したものであろうと考える。ただし、印を組む手の部分の表現が退化したものであるため、近い形状の印を組む腕と判別つきづらく、はっきりとは言いづらい点も否めない。ただ、この形態を持つ尊像の多くが阿弥陀如来であるため、今回の石仏も阿弥陀如来であるという理解に立ちたい。

石仏の製作技法に関しては、湖東地域に広く見られる、川原石を部分的に加工して外形を作る技法[5]で作られている。5についてもかなりの割合で原石面が残ることから、元々矩形に近い形状の自然石を使用しているものと考えられる。使用石材が犬上川流域で普遍的に見られる火成岩であることからも推定できる。なお、石材の材質については筆者の肉眼観察によるもので、理化学的知識に準拠して判断したものではないことを断っておく。そのため、材質については「火成岩」と指摘するに留めておく。なお、1、5については肉眼観察でいわゆる湖東流紋岩と呼ばれる石材と色調、風合が同一と判断できることを付記しておく。

これらの石仏を近接する正楽寺遺跡の石仏群での形態変遷[6]に当てはめてみると以下のようになる。

1～3はB型に属するもので、1、3はa類、2はb類のものである。1は彫られている尊像の表現、屋根と尊像との高さを考慮すると、a類3段階、2は屋根の部分が欠損しているため、決め手にかけるが、尊像の表現からb類3段階に位置づけられる。3も頂部が欠損しているため不確定要素が多いが、尊像の表現の稚拙さからa類4段階を下るのかもしれない。

4、5については正楽寺遺跡では同一のものは見出せないが、外形全体が、光背状をなすこと、屋根

図２　石仏実測図（Ｓ＝1/8）

の表現をしない点を考慮して、一応A型の範疇に属すると考えたい。4については胴体の表現がないため、a、b類いずれとも決めかねる。可能性としてはb類4段階のものがさらに退化したものと考えられなくはないが、ここでは結論を留保したい。5については、尊像の形態からa類に分類できる。像容からはA型a類の中でも比較的古相のものであると思われるが、胴体の表現に乏しいものがあるため1段階には位置づけしかね、むしろ2段階に属するものと考える。

4、5をA型の範疇に置くことの是非についてであるが、実際のところ、正楽寺遺跡のA型石仏に関しても大きくa、b類の二つに類別できるものの、外形については頂部に向かって幅が狭くなる傾向が強いものの、ヴァリエーションがいくつか存在するのが実情である。そのため、4は別として、5が形態上のヴァリエーションでありうることは否定しきれないため、現時点では5がA型の範疇にあることは妥当性があるように思われる。ただし、新たな系統に属する可能性も捨てきれないのは確かである。

このようなA型の石仏における外形のヴァリエーションの存在からは、外形は採取できた石材の形に規制されている可能性が伺える。想像を逞しくすると、採取した石材によってA、B型を造りわけしていた可能性も考えられなくもない。5が前述のような形態をしている理由は、はからずも板碑や卒塔婆に近い形状の石材が入手できたことが契機になっているのかもしれない。

このように、形態が正楽寺遺跡で見出せる石仏変遷過程における段階のいずれかに位置づけられるため、今回の石仏のうち3体はおそらく16世紀代前半までの遺物と思われる。しかしながら、3、4については時期が下る可能性がある。ただし、製作時期の下限を推定できる安土城跡出土の石仏の中には3と同様に尊顔、胴体の表現を持たないものがあるため、安土城跡出土の石仏と同時期のものとして差し支えないように思われる(7)。よって、4以外の石仏は1576年以前に製作された遺物とすることができ得る。4については判断材料に乏しいため、実年代については言及できない。

今回の資料の検討からすると、従来この種の石仏をA、B型の二つの形態に大別している(8)現状の理解は改める必要が生じるのかもしれない。現状では手持ちの資料が少なく、類例の増加を待たないとなんともいえないところで、新たな形態の分類等は今後の検討課題としたい。

今回の資料紹介に際しては、鉾山峰男氏をはじめとする地元甲良町金屋区民の皆様から了解を得ることができ、現地の作業に当たっては区の施設の使用等多大なご便宜を図っていただいた。現地の実測、採拓作業には辻川哲朗、辻川智代、高木香織諸氏の協力があった。また、仏像に関して山下立氏からご教示を得た。末筆ながら記して感謝いたします。

（うえがき　ゆきのり：調査整理課主任）

註

(1) 上垣幸徳「近江「阿弥陀仏」考―遺跡出土の石造物を中心に―」『続文化財学論集』文化財学論集刊行会　2003。

(2) 上垣幸徳『正楽寺遺跡』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会　1997。

(3) 松澤修「敏満寺遺跡石仏谷」、「中世における墳墓跡の比較考察」（多賀町教育委員会編『敏満寺のなぞを解く』サンライズ出版　2003。

(4) 瀬川欣一『近江　石のほとけたち』かもがわ出版　1994。同『近江石の文化財』サンライズ出版　2001。

(5) 兼康保明「彦根市妙楽寺遺跡出土の湖東流紋岩製小型板碑と製作工程」『滋賀文化財だより』№121財団法人滋賀県文化財保護協会　1987。

(6) 上垣幸徳「正楽寺遺跡の石製板碑型墓標の分類と変遷」『海が好きだ―藤城泰氏追悼文集―』藤城泰氏追悼文集刊行会　1999。

(7) 註(1)文献。

(8) 筆者はA、B型以外に頂部が平坦で表面の中央を深く彫り窪め尊像を造るものをC型として設定している。しかしながら、正楽寺遺跡以外で出土例をほとんど見ないため、今回は割愛した。上垣幸徳「正楽寺遺跡の石製墓碑と区画墓」『紀要』第12号　財団法人滋賀県文化財保護協会　1999。

編集後記

紀要第17号をお届けいたします。今号は８本の原稿を掲載することができました。内容等も、縄文時代から近世にまで至る、様々な時代を対象にしています。

この紀要を職員の研究活動の成果として、今後もさらに研鑽をつんでいきたいと考えておりますので、皆様からの積極的なご叱正・ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

(K.S.)

平成16年(2004年) 3 月

紀　要　第17号

編集・発行：財団法人滋賀県文化財保護協会
滋賀県大津市瀬田南大萱町1732-2
TEL：(077) 548-9780
FAX：(077) 543-1525
URL：http://www.shiga-bunkazai.jp
E-mail：mail@shiga-bunkazai.jp
印刷・製本：宮川印刷株式会社